

八、中仙道と朝鮮人街道

101

(一) 二本の大道

中仙道はまた昔不破道、東山道とも云った。

わたしたちの村を二本の大きな道路がほぼ東西に通じている。一つは村の山手の方をとおっている中仙道で、もう一つは村の平地の方をとおっている朝鮮人街道である。

草津・守山をとおりぬけてやって来た中仙道は野洲へ入り、野洲西小学校の付近で二またに分かれ、一つは朝鮮人街道となってこの村に入ってきているものである。

ちょうど親と子が旅をしているのにたとえると、野洲で分かれて親は中仙道としてずんずん東へ進んでいき、子の朝鮮人街道は親の手をはなれ、すこし北の方へ向かってひとりでぶらりぶらりと道草をくいながら、右にまわり左にくねり、しばらくひとり旅をつづけてのち、やれやれとまた親の中仙道と手をつなぐのである。

これら二つの道路は道はばも広く、わたしたち村民のためにはなくてはならない重要な道路であり、とりわけ滋賀県或は日本の交通運輸上、欠くことのできない幹線道路である。

二道は彦根市の鳥居本町で一しょになる。

五街道とは、東海道、中仙道、奥州街道、甲州街道、日光街道をいう。

1 中仙道

この道路は昔から有名な五街道の一つとして、大へん古い時代から盛んに利用されて来たもので、いつ出来たかははっきりわからないが、すでに鎌倉・室町時代には道路はよく改修され、たくさん人々がここをとおって鎌倉・京都の間をいき来したことが記されている。特にこ

102

一里塚は豊臣秀吉のころ、それまで一里の長さがまちまちであったのを三十六町と一定して一里ごとに一里塚をきずいたのにはじまる。現在、守山町役場前に一里塚の片側が残っている。今は土はとられて榎のみ。こゝから次が野洲町小篠原高乙、次は篠原村に地名のみ残る。朝鮮人街道の一里塚は本村の深沢にあった。

いう主要な道路が整備されたのは、室町時代の末期で街道には一里塚がつくられ、また松・杉・桜などの並木が植えられて休息に便利ようにした。江戸時代になると、街道には要所々に宿場町が発達し、宿屋や茶店などがならんでいた。今でも街道の両側に松並木の名残りを見ることが出来、宿場町の様子がうかがえるところもある。

沿道の辻町は、とりわけ昔からこの中仙道にゆかりの深かったことであろう。特に記念すべきこととして、かの明治天皇が北陸・東海地方御巡視の時、二度もこの辻町で御休息なされたことで、すなわち明治十一年十月十二日京都へ向かわれる時、同じく二十一日京都よりお帰りの時と二度共、その頃の森六兵衛家で御休みなされ、天皇は同家の庭先の泉水に遊ぶ「ひごい」を特に興味深



(一里塚)

近くに鏡の宿があった。

明治天皇聖蹟誌（滋賀県発行）参照
（辻町酒井清三郎家蔵）
御菓子器も酒井家に保存され、同家は森家と縁故深い。

103

江戸時代、東山道は東海道と草津で分かれ中仙道といった。それ以前は瀬田で分岐点をもった。
昔はよく鈴鹿山中で山賊が出たといわれている。

く御覧になっていたという。今同家の跡には大正のはじめ辻町の人々によって建てられた記念碑があり、又その時天皇にお出ししたという御菓子器が保存されている。

その後大正天皇も大正六年十一月十四日、この街道をおとおりになり、又今上陛下が昭和二十六年十一月十五日、滋賀県御巡視の時、この街道をおとおりになったことはわれわれの記憶に新しいところである。

このようにして昔から今に至るまで、いき来のはげしいこの街道は、それだけ交通上重要なところであるわけで、そのことはあの草津で分かれている東海道とくらべると一そうは

っきりする。こころみに滋賀県及び東北部近県の地図をひらいてみればなるほどとうなずける。中仙道は実に本県のみでなく、我国の最も主要な幹線道路ともいえるであろう。

しかし後でのべられる「国道八号線」「弾丸道路」の実現によって、将来この中仙道の利用がどんな変化をもたらしてくるか、そして辻町が、わたしたちの村が、それによってどのような影響を受けるだろうか、道路交通を中心に考えてみるのもおもしろく、又意義の深いことである。

104

この街道は昔浜街道、下街道ともいった。

明治二十六年家棟川にトンネルをつくり、義王隧道といったがそれまでの川を越す道は左のようになっていた。

家棟川廃川となり（昭二五）今のようにきり開かれた。

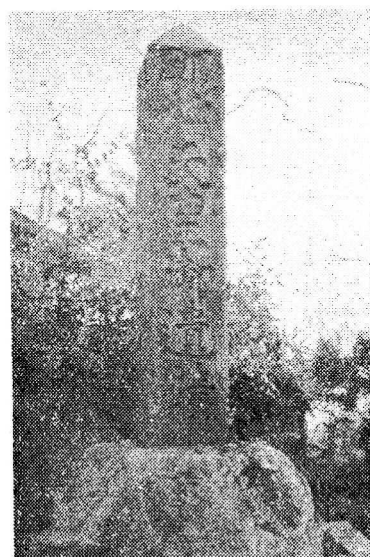
105

織田信長
安土、桃山時代の人、京都の本能寺の変で旧臣明智光秀に殺された。

2 朝鮮人街道

野洲から出て富波、永原をとおりぬけ深沢の方へのびているこの街道は、今では大分改修されてまっすぐになったが、以前はそうとうまがりくねっていたといわれる。大きな道路でありながらくねくねとまがっているところが、この街道の一つの持ちようである。この街道は前にも記されているように野洲町から彦根市の鳥居本町までの間をいい、道路としては長くはないが、しかし本県の湖東平地の町々を次々ととおっているの、なかなか本県として交通或は商業上重要な役割をはたしている。すなわち仁保、江頭、八幡、安土、彦根というふうには本県の湖辺に近い、商業の盛んな町々をとおっているため、一般の人々の利用は大へん大きいものがある。

さきにのべた中仙道と共に、この街道もそうとう古い時代につくられているようである。織田信長が安土に築城するに及んで、京都へ上るのに便利だということで大いにこの道路を改修した。室町、そして江戸と時代はうつってますます封建制下、道路の通行にしても制限をうけ、あの中仙道等の通行はなかなか容易ではなく、特に徳川幕府はき



（明治天皇聖蹟の碑）
（大正2年10月15日建立）

関所は古くから道すじにもうけられたが信長、秀吉は商業のさまたげだととりやめた。しかし徳川幕府は江戸を守るために、またきびしくとりしまった。



(昔の街道風景)

徳川幕府特に將軍家康は関ヶ原の役に勝ってからは、信長の前例にならいよくこの道路を利用し又朝鮮の使節（將軍が変るたびに敬意を表しにくる）に対してはこの道路を使用するようとりきめた。

永原の発達の主な原因は、やはり永原氏の城郭にある。永原市は現在年二回（八年十三日、十二月二十八日）に立つ、以前は下町がこの十二月の市を立てていたというが今は上町一か所にまとめられた。

106

わき水「お茶の水」といったそう。

びしくとりしまったので、一般の人々、朝鮮の人々の通行には江戸時代この街道を利用することが大へん多くなった。この街道が今に見る蛇行に似たまがりくねり、そして湖辺近く通じていること、なおまた湖東の町々を経ている等のことから、一は幕府の政策として琵琶湖の風光の佳絶、日本の国土の広大さをみとめさせ、一は本県の湖東の町々が商業発展の方策として、この道路を通じたものと考えられ、又こういう街道の名称も出来上ったものであろう。

街道の要所々々には人が集まる。そして軒がつらなる。これは自然である。永原もまた街道町として昔から栄えて来たものの一つである。古い書物にも永原町の名は出ている。永原城（永原御殿）の古蹟も残っている位だから。そしてだい分古くから野洲、守山、江頭等と共に「市」が開かれて来た。現在見る「永原市」もこれである。

永原はまたこの街道の要所として一つの宿場町でもあったようで、今はもうそのおもかげはないが、多くの旅人が旅のつかれを熱い番茶でいやし、宿のふとんに足をのばして休んだことであろう。家棟川の付近には茶店がのれんをたれ、そこには冷たいわき水がこんこんと流れ出ていたという。この清水をおもうだけでも昔の永原のにぎわしさが眼に浮んでくる。しかし年毎に開かれている「市」は最近あまり振わなくなって来て、今見る「市」の品物は子供の玩具が主であるようだ。しかしそれにかわって、永原は大分商店街としてのおもむきを見せて来つつある。交通と生活そして商業、この三つはそれぞれ深いつながりをもつ。われわれは村の生活、生き生きした村の生活のいづきが力強くわき上ってくる、いやわき上らせる清水を掘り下げくみ上げなくてはならない。

3 二大道の交通量

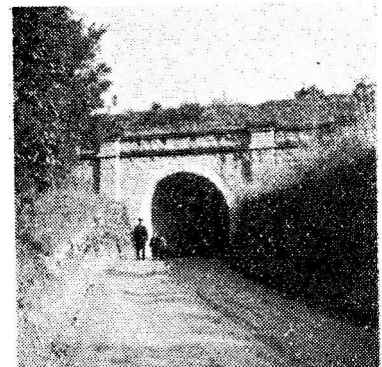
年の瀬もせまった或日、近くの町へ買い物に行った道子さんは、中仙道を自転車でおとりながら「兄さん、ちょっと待って。」とすんだ

声をはり上げながら、たびたび兄さんの通君を呼んでいる。「早く来ないか！ 買い物がおくれるじゃないか。」と兄さんが大分前の方で少し自転車のペダルをゆるめながら、これも大きな声でさげんでいる。「だって大きなトラックが前から後からも次々来るんだもの、あむなくて乗れやしないわ。」となかば泣き出しそうにいつている。……通君は中学二年で道子さんは小学校の五年生だ。……ようやく追いついた道子さんはやれやれといった顔つきで、しかしふしぎそうに頭をかしげて「どうしてこの頃はこんなにトラックがよくとおるの？」と兄さんにたずねる。「そりゃあたりまえだよ、年末だもの。」「だけど中仙道ただわ、こんなの。朝鮮人街道ってさっぱりとおらないわ。」

人	自転車	に車	トラック	バス	乗用車
正正正正正	正正正	正正	正正正正正	正	正正
正正正正正	正正正	正一	正正正正正	正	正正
正正正正正	正正正	正	正正正正正	正	正正
正正正正正	正正下	正	正正正正正	正	正正
正正正正正	正正	正	正正正正正	正	正正
107人	68台	26	128台	17台	24台

辻町内はせまくてしかもくねっている。特にトンネル（家棟隧道大正六・十竣工）附近は危険である。

道子さんはなかなかよく考えてきて兄さんをしてこずらせる。「うん……」通君はしばらく考えていて「ああそうだ。それはね、中仙道と朝鮮人街道とはね、道のたち（性質）がちがうからだよ。出来方がちがっているからだよ。ほら中仙道の方は割合道がまっすぐだろう。辻町のところは少し道がせまいが、ほかは道はばも広いので通行しやすいからね。」「そうね、朝鮮人街道は道もせまいしくねくねまがっているわね。」「そうだ。いいことに気がついた。だからもっとこの二つの道をくらべて研究してみると、いいことがわかるかも知れないよ。」「そうね。」「あ、それでね、もうじき冬休みだろう。二人でーぺん中仙道と朝鮮人街道の両方の人や車のいき来の数をしらべることにしよう。そうしたら何かきっと面白いことがわかってくるかも知れないよ。」「そうね。」「……二人は正しく左側を、そしてゆっくりペダルをふみながら、大売出しののぼりのはためいている師走の街道町へ入って行った。



（家棟隧道と中仙道）

(二) 国道八号線と弾丸道路

1 国道八号線

毎日、ごうごうとブルトーザーのうなりとトラックのひびきが聞えてくる。ここは辻町のうら、山手に近いところに道路ふ設の工事がぐんぐんと進められている。これが国道八号線の工事現場だ。もり上った土砂、山はだ



(国道8号線とトンネル)

がみるみるおしならされもぎとられて、きれいな茶かっ色の道路にかわっていく。すごいブルトーザーの腕力。横網が相手をぐうんと押し出していくのに似ている。胸のすく思いだ。

この工事は昭和二十一年十月からはじめられ、もはやでき上がった区間もある。ゆくゆくこの道路は西の方へのび、手原で国道二号線と結ぶ計画だという。しかしそれまでには今後まだ五年位はかかるそう。そしてやはりこの辺で一番国難な工事は野洲川四五〇メートルの橋のかけわたしだということだ。

この村の工事区域はそう長くはないが、天井川の家棟川があり、ここでは相当困難な工事を続けたようで、川をたち切り下へ道を通すのであるから、時には豪雨にあい堤防がきれて出水をみたことがある。又宮山の山腹をきりとおす時に古墳が出て、しばらく検視がすむまで工事をひかえたこともあった。今では道路は六・七分どおり出来上り、家棟川の下にコンクリートの頑丈なトンネルがぼっかりと口をあき、道の両側には排水溝をつくり、土手にはきれいに芝草がうえられて来た。しかし八号全線が完成して、威勢よくトラックが走り、音もなくすべるようにハイヤーが流れるのは、まだ当分見られないのではなかろうか。

2 弾丸道路

国道八号線と並行してその二百メートル余りまだ山手の方に、今度は弾丸道路をふ設する計画が進められている。すでにこの村の区域もその測量はすんでいるが、まだはっきりときまったわけではない。

弾丸道路はどのように利用されるのだろうか。それは文字どおり弾丸の速さにも似たものすごいスピードで疾走する各種交通機関の利用が考えられる。むろん、道幅二十二メートルといわれるまっすぐな道路が出来たら、さぞスリルにとんだ光景がみられるかも知れないし、

蒲生郡馬淵村の六枚橋、篠原村小堤間の五杉は完成。

草津線手原駅の附近。

国道二号線
昔の東海道をいう。

昭和二七・一二現在

109

道幅は
全巾 八・五米
有効巾七・五米

測量は昭和二七・七に一応なされている。

110

この道路の使用は有料だという。

又見事なものであろう。しかしこの道路は県としては湖国にふさわしい観光方面に力を入れ、要所々々にはホテル或は観光施設をして、大いに観光客の本県誘致（さそい入れること）を考えているという。

（三） ひらけいく道

遠い昔から今に至るまで、この村に通じる大小さまざまな道は、長い歴史の足跡を印しながらもくもくとして村の人々を、遠い見しらぬ人たちを迎え又送って行く。それこそ地道にはたらきつづけて来た道。……「道路愛護。」わたしたちはこのことばをよく耳にするが、はたしてそのような温かい心でふみしめていく道をおもいやってみたことがあるだろうか。そうだ、道にも血がかよっているのだ。汗がにじみこんでいるのだ。人も生きている。道も生きている。昔の人も、昔の道も！……

新しく力強いブルトーザーのうなりが今日も辻町の山々にこだまする。ひらけいくわが村へのさきがけともききとれる。時は流れ、道はひらけ、社会は動く。わたしたちはしっかり道に足をふみしめ、新しい道を開いていこう。そしてその道はひらけいくわが村につづいているのだ。

附表 中仙道諸車交通量 （参考）

種 別		上 り (愛知・岐阜)	下 り (大阪)
トラック	大	1 7 5 台	1 4 6 台
	小	3 5	3 1
乗 用 車		7	8
其 の 他		2 5	2 4
計		2 4 2	2 0 9

- 註 1 昭和二十七年十一月十三日、二十四時間中の調査である。
- 2 本表は国道八号線建設事務所の調査による。
- 3 当日は比較的往来が少なく平素はもう少し多いという。

弾丸道路

全長五二七キロメートル、東京－神戸間を五時間で走る。

出来上るまで五ケ年間、約一一四五億円の経費。

今年（昭二八）から二ケ年間に東京から静岡県御殿場（ごてんば）までつくり、そのあとだんだんつくっていく。

速 力

- 1 坂のない平なところ一二〇キロ。
- 2 ゆるい坂道、人家のところ一〇〇キロ。
- 3 トンネルの前後、急な坂道、山道では七〇キロ。
- 4 平均一〇〇キロぐらい出せる。